

その着こなしに

理由アリ

文 中野香織

第2回



海外要人を迎える大臣の身のこなしにも注目。洗練のVゾーン、プリンシプルにのっとった着こなし、そして最高の笑顔で迎えるのだ。写真は麻生太郎外務大臣と中国の李肇星外相 © Reuters/AFL0

麻 生太郎さんのスーツ姿は、遊び人みたいに見えませんか？と聞かれたことがある。

あるお堅い新聞の政治部の記者さんだったが、どうやら、「ナローシヨルターのスーツをジャストサイズで着る」とか「襟と身頃の色が違う」クレリックシャツを合わせる「鮮やかな色のカフリンクスをのぞかせる」というような、従来日本の政治家からしくないファッショナブルな着こなしの強い印象が、そのような疑問を生んだようであった。

ファッショナブル遊び人、だなんて、古臭い偏見。しかし、この偏見が今も日本全国津々浦々で根強く

生きる。だからこそ、先生方は、(とりわけ地元の)人々の前で演説するときには、あえてタサめのスタイルで武装する。車中で着ていたシャネルをユニクロに着替えて支援者の前に立った某女性議員、とか。男性議員も、カフリンクス(ちゃらいと見る人がいる!)をつけているのかどうかすら見えない、ゆつたりめの貫禄スーツをお召しの方が多し。あえて、政治家ファッションなんですね、あれはきつと。

そ んな中であって、麻生太郎さんである。

麻生さんは、支援者に媚びるような「あえてタサめ」をしない。かといって「背伸びしておしゃれをしている」感も、ない。ごく自然な振る舞いとして、あの着こなしがあるように見える。だから、神田神保町あたりのメンズ誌編集者の間で絶大な人気を誇る。「マンガ大好き」と公言する麻生さんの自然な姿が、秋葉原に熱狂的なファンを生んだように。

本欄担当K君などは、うっとりと言う。「シャツの剣先の位置や、袖の露出具合、座るときのボタンはずしに至るまで、すべてが原理原則にのっとっているんですね。麻生さんの思考回路も原理原則に貫かれてるんだらうなあ、と魅力的に見えてくるんです」。

ファッションを知る男たちを夢中にさせる男、麻生太郎。では、麻生さんご自身は、服装におけるプリンシプルのようなものをおもちなのだろうか？ 21年間に麻生さんの秘書を務める村松一郎さんにお話を伺う。「洋服に対するセンスは、先生がイギリス留学中に身につけられたものです。ベースになっているのはブリティッシュ・トラッドといえますか」

プリンシプルに貫かれた、政治家の着こなしとは

「いいえ。20歳のとき、お母様に連れて行かれて初めてスーツを仕立てたテーラーで、今も作っていらつしやいますよ。青山のテーラー森脇さんです。お父様から息子さんに代替わりしても、ずっとそちらで」

シルエットや袖口の絶妙な長さなど、すべて麻生さんの好みを反映したものだという。いろいろブランドを試すことはせず、スーツは森脇さん一筋。律義な方なのですね？

「先生は海外ブランドのことは、あまり詳しくありません。むしろいったんお持ちになったものは、本当に大切にしています。チェスターフィールドコートだって、もう22年以上着ていらつしやいますし」

と村松さん。

ええっ、22年!?

「襟の部分だけを取り換えて、ブラシをかけながら、ずつと。ルイ・ヴィトンのスウィッチケースも、かれこれ30年以上でしょうか。持ち手が壊れたら、ヴィトンの工場へ送ってそこだけ取り換えてもらって。ライターもそうです。修理して、長くお使いになるんです」

靴(細身の「バリー」。愛用期間が長かった)も自分で毎日シューズリナーを入れて、底を張り替えながら長もちさせているという。一方、修理のきかないものは時代にに応じて替えていく。現在、シャツは香港のベニンシユラホテルにあるアスコットチヤン、タイはエルメスがお気に入り。秘書の方や奥様がお見立てをするというのでは？

「120%、ありえません(笑)。先生がすべてご自分で選んで購入なさいます。下着に至るまで」

「ロンドンのハロッズ百貨店です。周囲に配ってくださいます(笑)」

身につけるものは自分で選び、いったん所有したものは、修理しながらとことん付き合う。目を楽しませる時代感、消耗するアイテムで演出する…。

筋が通ったそんな服との付き合いの日々があるからこそ、「海外の要人とお会いになるときも、特に気負わず、普段のまま(村松さん)。「普段のまま」でどんな要人と一緒に映っても、国際基準をクリアしたごく自然なスタイルで、見劣りしない。ちなみに国際プロトルに従わねばならない公式行事で用いるシルクハットや燕尾服も、すべて麻生さんご自身が管理している。

天 然ではなく、日々の積み重ねによって獲得された、技ある自然さ。これこそルネサンス時代以来、地位ある男の気品を生む最大の要素とされてきた「スプレッツァトゥーラ(Sprezzatura、さり気なさ)」に通じるものではないか。ルネサンス宮廷人も、そういうえば、舞踏、テニス、狩猟を立派にやっていたのけばならぬ「遊び人」といえば「遊び人」だったのですけれど。

Kaori Nakano
服飾史家。今号で連載2回目。UOMOが提唱するエレガンスを、毎回人物を切り口にしてわかりやすくひもときます。【朝日新聞】「Openers(ウェブマガジン)」「日本経済新聞」など連載多数。最新刊は『着るものがない!』(新潮社)。